

# 軍事史学

第56巻 第3号

## 巻頭言

### 上野の山の軍事史

鈴木淳

ヨーロッパの古い街にはたいいてい城壁の名残があり、周辺や高所には要塞の跡がみられることも多い。東京にも江戸城の遺構があり、外堀もかなり残っているのだが、どこか違う。江戸城は武蔵野台地の東のへりに作られた。上野の山は江戸城本丸の東北東約三・三キロメートル、武蔵野台地が最も東に張り出した部分に位置する。江戸を軍事的に守ろうとすれば、江戸の北から東を流れる荒川・隅田川は、南の多摩川とともに、重要な防衛線である。それへの見通しが利き、渡河点への砲撃も可能な上野の山は、ヨーロッパであれば、大砲を備えた要塞が置かれそうな場所である。しかし、そのような施設が設けられたことはない。

一七世紀初頭の上野城下の整備では、江戸城と上野の山とのちょうど中間あたりに、江戸城の外堀の役割を果たす神田川が導かれた。武蔵野台地の一部である駿河台を掘り割って神田川を導いたので、堀外の湯島や本郷からは本丸が見通せず、江戸城の防衛施設としては優れた構造であった。一方で、同時に上野の山と隅田川との間に設けられた日本堤は治水のためのもので、軍事的な防衛施設ではなかった。神田川の流路変更も、かつて神田川が流れていた大手町や日本橋周辺を水害から守る効果をあわせもっていた。

軍事的には、江戸全体ではなく、江戸城の防衛に必要な範囲だけを外堀で囲い込み、水害に対しては、江戸全体を守ったのが幕府であった。明暦の大火後、幕府は火災が延焼しにくい街を作るため、強制移転により隅田川の東岸を含めた江戸の拡張を進めたが、それに際して軍事的な防衛施設は作られなかった。幕府が江戸市街地の整備で重視したのは、軍事的脅威ではなく災害への備えであった。

江戸城防衛にかかわらない上野の山には、寛永寺が開かれる。大寺院はまとまった兵力が宿営できるので軍事的にも意味があるが、防衛施設ではない。それ故、上野の山の戦いは長くは続かなかった。また、全国的な都市の防衛施設の乏しさが、戊辰戦争を都市を巡る戦いではなく城を巡る戦いとさせ、内戦での無益な損失を局限したとも言えよう。明治期にも、鎮守府を守る要塞は作られたが、都市を守る要塞は作られなかった。欧米とは異なり、軍事的に都市を守るという形で防衛への合意を培っては来なかったこの国の歴史が、防衛を巡る国民の意識にどう影響しているのか、東京大空襲犠牲者の仮埋葬地でもあった上野の山を歩きながら考える時間を持ちたいと思う。

(東京大学)